

大学のアカデミック場面の言語活動への参加に関する考察 —授業内のコメント活動の新参者に着目して—

黄均鈞

要旨

1. 研究目的及び問題意識

本稿は日本の大学のアカデミック場面で行われるコメント活動に焦点を当て、当該活動の新しい参加者（以下、新参者）はどのようにコメント活動¹に参加しているかという参加の実態の過程を明らかにすることを目的とし、新参者のコメント活動への参加の度合いの深まりとは何かを考える。

こうした研究目的を持ち始めたきっかけは筆者自身の体験によるものである。7年前、中国国内の大学の日本語専攻出身だった筆者は、大学卒業後来日し、日本の大学／大学院の授業で行われるコメント活動において、大きな不安と戸惑いを覚えた。だが、困難と不安を抱えつつ、始まった活動参加は、徐々に自分らしくその場で振る舞えるようになり、筆者自身も自らの活動参加の変化に対して不思議だと感じた。そこで、筆者のような、日本の大学のアカデミック場面で行われるコメント活動の新参者が一体何によってどのようにコメント活動への参加の変化が実現したのかという問いが生まれてくるわけである。

2. 日本語教育での「コミュニティへの参加」という視点の発生及びその問題点

第2章では、現代の第二言語教育における、構造主義のアプローチ、コミュニケーション中心のアプローチ、社会文化的なアプローチという3つのアプローチの歴史的な変遷を概観した上で、日本語教育における「コミュニティへの参加」という視点の位置づけ及び、それがもたらした意義を検討する。また、その反面、コミュニティへの参加は言語学習の母体として見なされ、参加者のコミュニティ内の活動への参加の

¹ 本稿は大学の場面で参加者のパフォーマンスの改善を目的としてグループ単位で行われる特定の人に対し、質問や意見やアドバイス等を述べる言語活動を、用語上コメント活動と呼ぶ。

在り様を不問にし、「時間がたち、参加を積み重ねていけば、活動参加がうまくなり、新参者も徐々に古参者になっていくだろう」という思い込みが前提にあったと指摘した。

筆者は言語活動への参加が「自然に」、「慣れていく」ものという考え方に疑問を投げ、参加者自身がどのように能動的に活動参加を学んでいくか、そこでどのような困難と出会い、また何によって、どのようにそれらを乗り越えていくか、という参加者の活動参加そのものの学びに視点をシフトしていく必要があると考えている。

そこで、本稿は人間活動を分析するのに適する活動システムモデル（エンゲストロームの、1999）の6つの要素を援用したうえで、「言語活動への参加」を新たに捉え直すことを試みた。また、捉え直した参加の概念に基づき、【ツール】、【ルール】、【コミュニティ】という3つの要素に光を当て、以下の3つの課題を設定し、論を展開した。

課題1：新参者のコメント活動への参加の【ツール】は、活動が展開されていく中で、何によってどのように身につけてき、徐々に精緻化してきたのか。

課題2：新参者のコメント活動への参加において、どのような【ルール】を読み取ったか、活動が展開されていく中で、読み取った【ルール】は何によってどのように変わってきたか。

課題3：新参者のコメント活動への参加において、【コミュニティ】及び「コミュニティ内の構成員との関係性」をどのように捉えているか、活動が展開されていく中で、その捉え方は何によってどのように変わってきたか。

3. 各章の概要とその結果

3.1 調査及び各章の概要

以上の3つの課題に答えるため、本稿は大きく2つの調査を行った。

第3、4章では大学の日本語教育実習の授業内で行われるコメント活動を調査フィールドとし、課題1の【ツール】としての「コメント」に焦点を当てる。具体的には、第3章では、日本語教育実習のコメント活動における「よいコメント」はその

場の新参加者が、どのように身につけてきたかについて分析する。それから、第4章は、参加者は【ツール】としての「コメント」を述べる、及び受け取る際の意識に光を当て、主体の【ツール】使用の意識の側面の変化を扱う。その理由は、主体の【ツール】に対する認識の在り方は、必然的に【ツール】使用の在り方に影響を与えているため、認識の変容を見ることによって、私たちは、新参加者の【ツール】使用の変容をより深く理解することができると考えられるからである。

第5, 6章は、フィールドを変え、文系大学院のゼミの質疑応答場面というコメント活動を取り上げ、1人の留学生であるコメント活動の新参加者に対する縦断的な調査を通して課題2と課題3に答えようとする。具体的には、第5章では、新参加者はゼミのコメント活動における活動参加において、読み取ったコメント活動の【ルール】を扱い、とりわけ、活動の展開と共に変わってきた【ルール】の中身、及び変わった要因を考察する。それから、第6章では、新参加者が【コミュニティ】、及び「コミュニティ内の構成員との関係性」に対する捉え方を扱い、活動の展開と伴う捉え方の変容、及びその要因を検討する。

3.2 3つの課題への答え

課題1への答え。

第3章を通して、「伝え合い」と「積み重ね」という性質を持った活動の場によってコメント述べて必要とされる知識が絶えず深化されてきたことと、「コメントの意義への認め」と「他者との関係性の変化」による参加者の「積極的な聞く姿勢」及び「他者を意識したコメント述べ」という態度面の変化、両者が相乗効果を果たし、正のサイクルとなり、新参加者のコメント活動参加のための【ツール】の学びに寄与していることが分かった。

また、第4章を通して私たちは新参加者の【ツール】の学びの背後には、単に実践知の積み重ねと参加者の参加態度の変化だけでなく、主体の【ツール】に対する認識の変容も伴っていることが分かった。こうした主体の【ツール】に対する認識の変化は参加者のコメントを表現する、及び他者からコメントを受け取る、という【ツール】の使用意識の変化でもあると言える。

以上から、新参加者の【ツール】としてのコメントの学びは、コメント活動が行われる場の性質による実践知の獲得及び、「コメント活動の意義への認め」と「場の関係性

の変化」による参加者の参加態度の変化、という両者の相乗効果による【ツール】の質の向上である一方、参加者の【ツール】に対する認識の深まりも伴っていることが分かった。この意味で、主体が活動参加としての【ツール】の質の向上と【ツール】に対する認識の深化は新参加者のコメント活動への参加の度合いの深まりの1つの側面であると言えよう。

課題2への答え。

第5章では【ルール】を人間個人の認知システムであり、各自の頭の中にある行動の見取り図であるというグットイラフの個の文化の概念を用いて分析した。その結果、分析の対象となった留学生Aは「自分の行動を慎重にすべく」、「その場にいる正統性として発言する」、「思いついたことを言う」、「相手の考えを広げられることを言う」という活動参加の【ルール】、及びその変容過程が見られた。また、その変容に当たっては、新人である自分といったような「主体の自己認識」、コメント／質問できるかどうかという「【ツール】使用に問われる実践知」、コメント活動の進め方という「参加スクリプトの有無」、「参加者との関係性への捉え方」、そして「ゼミのコメント活動の意義への理解」という要因は、留学生Aの活動参加の【ルール】の構築、又はその再構築に影響を与えたと分かった。

このように、活動参加において、今まで自分が持っていた【ルール】に気づいたり、検証したり、又はそこから新たな参加としての【ルール】を作り出したりすることが、【ルール】の変容に当たっては大事であると示唆された。この意味で、主体が自ら持っている参加としての【ルール】への検証と刷新は、新参加者のコメント活動への参加の度合いの深まりの1側面でもあると言えよう。

課題3への答え。

まず、コメント活動が行われる「コミュニティ」(ゼミ)への捉え方について、新参加者留学生Aは帰属感のあり、学びが得られる場でありながら、プレッシャー及び緊張感を抱えているという認識を伺った。こうしたコミュニティへの捉え方は、新参加者留学生Aの緊張感のある活動参加をもたらした一方、励みを感じつつ、リラックスした参加姿勢も同時に生み出していると考えられる。

その一方、「コミュニティの構成員との関係性」に関しては、最初の「新参対古参」から、「友人同士」を経て、「共に学ぶ仲間」へ、というように留学生 A は、自分と他のゼミ生との関係性への捉え方がコミュニティへの参加を通して変化してきたことが分かった。また、そうした関係性の変化の背後にはある、「ゼミというアカデミック世界の門外漢の新人である私」、「他のゼミ生と親しい友達である私」、そして「他のゼミ生と共にゼミの研究活動に取り組む研究者である私」という留学生 A のアイデンティティの変容も含まれている。

以上から、新参者のコメント活動への参加の度合いの深まりは、新参者の一ゼミというアカデミック共同体の外部者から内部者への移行、この場合、アカデミック共同体の一人前の研究者になりつつあるというアイデンティティの変化を伴っているものだと考えられる。

各章の結論を踏まえた上で以下のことが言える。それは、新参者のコメント活動への参加の度合いの深まりとは、活動参加としての【ツール】(コメント)の質の高まりと【ツール】に対する認識の深化、主体の持っている活動参加としての【ルール】への検証と刷新、そして新参者のアイデンティティの変容、という3つの側面を有している。

4. 日本語教育への提言及び今後の課題

以上の結論を受け、本稿は「学習者／参加者の言語活動への参加の支援」を目的とする言語教育を提言した。こうした中で、言語活動に参加していくためのことばの力とは何か、言語活動の場におけるルール、及びそのルールの学びとは何かを再考する必要があると指摘し、また、言語活動への参加に当たって、参加者の「なりたい自分」を意識化することの重要性を述べた。

だが、本稿はまだいくつかの課題が残されている。まず、【分業】という要素についての考察は今度できなかったため、今後の課題として分業の変化がある言語活動に注目していく。また、一つのコミュニティだけではなく、複数の言語活動を横断的に参加している現象も今後の課題としたい。更に、多くの言語活動への参加の事例への分析を通して、6つの要素に基づいた参加の概念をより精緻化していきたい。